房総の古墳時代に思いを馳せる

ー内裏塚古墳群見学ツアーに参加してー

大木英雄

３月１９日、生涯学習応援団ちば主催の「内裏塚古墳群現地見学ツアー」に参加した。

明治大学名誉教授大塚初重先生を講師にお迎えし、内裏塚古墳群案内ボランティアの猪武司さんの先導で、ＪＲ内房線青堀駅を午前１０時３０分に総勢３０名で出発した。

内裏塚古墳群といえば、小糸川下流域の低地に所在する古墳群、確認済みの古墳の総数は４８基。そのうち本日は１７基ほどを見学の予定だ。古墳群の造営期間は、５世紀～７世紀、当古墳群を造営した人びとは、小糸川流域一帯を統括した首長層（須恵国造）とその一族か。海に臨む低地に、盾形周溝をもつ１００ｍ級の大型古墳が連なる様子は、国内最大の古墳「仁徳天皇陵（大山陵古墳）」を有する大阪府堺市百舌鳥古墳群を彷彿させる南関東屈指の古墳群である。全行程約８㎞の予定だが、期待に胸が弾む。

猪さんの解説、大塚先生の指導・助言をいただきながら進む。先ずは、駅前の上野塚古墳の見学。原型を留めていないが、最小規模の前方後円墳で、内裏塚古墳に次いで２番目に古い。帆立貝形前方後円墳とも呼ばれている。次いで、民家の間を通りながら西原古墳で、この古墳群の内部主体の大部分を構築している海岸でとれる磯石（凝灰質砂岩）を寸見しつつ内裏塚古墳に至る。

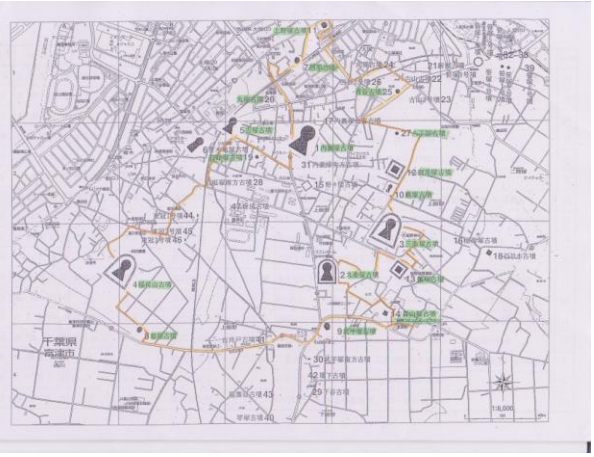
内裏塚古墳は、墳丘長１４４ｍの南関東最大の古墳である。竪穴式石室が２基ある。明治３９年に発掘され、円筒埴輪、様々な形象埴輪が確認されている。副葬品でユニークなのは金銅製胡籙で、朝鮮半島で製作されたらしい。大塚先生から、「この胡籙は、乗馬の風習がいつ日本に入ってきたかを考える上で重要な遺物である。須恵国造の系譜に連なる人の墓であろうが、古墳群の一番最初に最も規模の大きい古墳を作ったことは謎である。」などの解説を聞いた。また、猪さんからは、「後円部と前方部の高さの違いが、前方後円墳の時期を見極める指標となる。」との説明もあった。平成１４年に国指定史跡となっている。

白姫塚古墳、古塚古墳を経て、稲荷山古墳に至る。墳丘長１０６ｍ、二重周溝の美しい古墳だ。内部は未発掘。墳丘裾には円筒埴輪列かあったとのこと。６世紀後葉の築造と推定される。その後、姫塚古墳、武平塚古墳、森山塚古墳の形状を確認しつつ歩を進め、飯野コミュニティーセンターで昼食をとる。大塚先生の有意義なコメントが入る。

午後の部も結構強行軍だ。大塚先生の健脚ぶりには驚かされる。さて、午後からは、長い間この古墳群の発掘調査を手がけている、富津市教育委員会の小沢洋さんが加わり解説が一層充実した。森山塚古墳、九条塚古墳、亀塚古墳、三条塚古墳、蕨塚古墳、割見塚古墳を順次見学し、小沢さんからは「内部主体を作っている磯石は、柔らかく大きな加重に耐えられないため、この古墳群の古墳の高さが低くなっているのかも知れない。内裏塚・九条塚・三条塚などの名称は、高貴な人の墓という伝承があったせいかも」などの話を伺った。

午後では九条塚古墳と三条塚古墳が圧巻だった。前者は墳丘長１０３ｍ、後者は１２２ｍの前方後円墳。九条塚古墳には円筒埴輪が輪列していたが、三条塚古墳には埴輪がない。いよいよ終末期の古墳になったのだろう。三条塚古墳を最後に大型前方後円墳は造られな

くなった。割見塚古墳は、一辺が７５ｍの巨大な方墳だ。これは、古墳時代の終わりを告げているようだ。

今回のツアーで最大の楽しみは西谷古墳の発掘現場を参観できたこと。直径２８ｍの小さな円墳だが、都市計画道路建設に伴い発掘調査を行っており、発掘調査の担当者である(財)千葉県教育振興財団文化財センターの白井久美子さんと加藤正信さんの説明を聞きながら、羨道から横穴式石室を直に見ることができた。石室内の土をフルイにかけ、小さな遺物を探している作業も見学することができた。内裏塚古墳が間近に見える。このあたりには、笹塚古墳など円墳の群集墳が多い。

今回、一度に多くの古墳を見て、頭の整理がまだつかない。しかし、内裏塚古墳群造営に関して、須恵の各首長層の権力関係、政治体制、東京湾から見た古墳群の壮観さ、海路を利用してのヤマト政権との繋がりなど、思いを馳せることができた。本企画に参加させていただいたことに感謝している。